『かむろ』における＜カムロ＞形成について

Creating an Imagined Community of “Kamuro” in *Kamuro*

藤原 まみ*

FUJIWARA Mami*

（摘要）

本論は雑誌『かむろ』を精査し、その言説空間について考察する。『かむろ』は山口県周防大島町沖家室島在住者と、周防大島町沖家室島出身で国内各地、朝鮮半島、中国東北部、台湾、ハワイ、北米などの海外に滞在している者に、沖家室島の情報や海外在住の沖家室出身者の情報を双方向的に発信した、1914 年（大正 3）から 1940 年（昭和 15）まで刊行した雑誌である。これまで、この雑誌はほとんど研究されておらず、文学・文化的側面においては、一切分析されていない。本論では『かむろ』によって想像体としての＜カムロ＞が創り出され、それによって、島の内外在住者間のネットワーク形成とその強化に寄与していた様を確認する。

關鍵詞：移民，出稼ぎ，周防大島，山口

（Abstract）

The aim of this paper is to report on the result of an investigation of a magazine titled Kamuro, whose literary significance has not been fully studied. Kamuro was a magazine published and edited on Kamuro Island in Yamaguchi Prefecture, Japan from 1914 to 1940, totaling 158 volumes. Kamuro had the distinctive feature of playing a crucial role in providing the people related to Kamuro island with opportunities of interaction between those who left the island and emigrated to other countries and areas and those who stayed. All of the articles in the volumes of Kamuro were contributed by people living in the island as well as those who emigrated from the island. Kamuro created a literary and cultural network between these people, playing a significant role in creating an imagined “Kamuro” community.

Keywords: immigrants, migrations, Suoh-ohshima, Yamaguch

1. はじめに――『かむろ』の背景――

山口県周防大島では近代以降多くの人が島を離れ、広島や長崎など日本国内の都市、ハワイや台湾など海外の様々な地域に、自身の生活拠点を築いてきた。周防大島の人々の、移動に対する積極性は数値的にも明確である。例えば、１８８５年から１８９４年にかけて日本からハワイへ渡った「官約移民」制度では、その総数２９，０８４人の１割を超える３，９１３人が大島郡（周防大島）出身であったことが記録されている[1]。また、１８９４年にハワイ共和国が成立して官約移民制度が廃止され、私約移民へと制度が変更された後も、周防大島（特に、沖家室島）からはさらに多くの人がハワイへ渡っていった。日露戦争（１９０４年～１９０５年）以降、アメリカ本土では排日運動が起こり、その影響を受け、ハワイ契約移民制度が終了する。さらに、移民契約の終了した日本人が、ハワイからアメリカ本土に移住する「転航」が１９０７年に禁止され、翌年の「日米紳士協約」によって、家族の呼び寄せを除いて、労働目的の移住が阻止される事態となった。しかしながら、このような状況も周防大島の人々の移動を妨げることはなく、むしろ、人々の移動先の選択肢をさらに広げることとなっ

＊　山口大学国際総合科学部

た。ある者は近親者とのネットワークによってハワイへ渡り、ある者はインドネシアやシンガポールなど新たな移動先を選択していった。

周防大島の人々が移動に対して極めて柔軟であったことの、社会的・歴史的背景について、先行研究では以下のような点を指摘している[2]。（１）周防大島での人口膨張とそれに起因する貧困、（２）島の基幹産業である漁業によって培われた、移動に対する心理的障害への耐性、（３）他地域から重宝される、大工、石工、塩田の浜子、漁師などに関連した特殊技術の保有、（４）身近にいる、成功者の存在。本稿では上記４点を踏まえ、周防大島の人々の移動に対する柔軟性を考察するために、その最初の一歩として、周防大島沖家室島の人々が発行した雑誌『かむろ』に着目する。これまで『かむろ』は民俗学・社会学・歴史学的資料として取り上げられ、主に周防大島沖家室島とハワイとの関係に焦点があてられてきた[3]。しかし、本稿では周防大島沖家室島とハワイとの関係に限定することなく、『かむろ』の文学的側面に着目し、『かむろ』が創り出した言説空間において何が語られ、それは周防大島という共同体に何をもたらしたのかについて考察する。１５８号まで発行された『かむろ』の全体像把握は今後の課題とし、本稿では１９１４年発行の創刊号から、３ヶ月毎の発行であった『かむろ』が月刊となった１９１８年発行の第１３号までを、『かむろ』の初期と考え、特徴を探っていく。

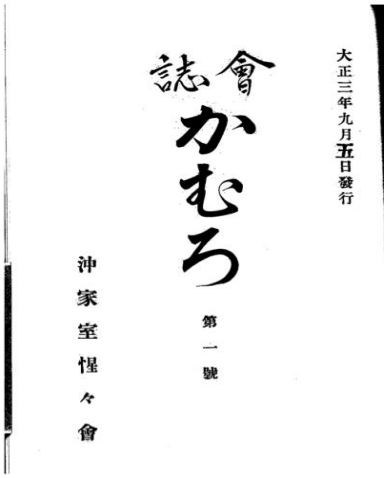

図１『かむろ』創刊号　表紙

2.『かむろ』の言説空間

2.1　『かむろ』の人的ネットワーク

雑誌『かむろ』は１９１４（大正３）年９月に沖家室惺々会[4]の機関紙として創刊され[5]、周防大島町沖家室島在住者と、一時的であれ島から離れている人々との協同によって、１９４０（昭和１５）年３月の１５８号まで発行を続けた雑誌である。創刊号の後付けには編輯兼発行人として柳原良助氏の名前が明記されている[6]。（図２参照）『かむろ』の創刊時期はハワイへ移住した沖家室島の人々が「家族や親族を呼び寄せてハワイでの生活の基盤を築いていった[7]」時期であり、また、沖家室島の人々がインドネシア、台湾、ブラジルなど様々な地域に活動圏を広げた時期でもある。『かむろ』創刊号には「消息」欄があり、そこでは沖家室島在島者と在外者の現況が列挙されている[8]。この「消息」欄の情報は

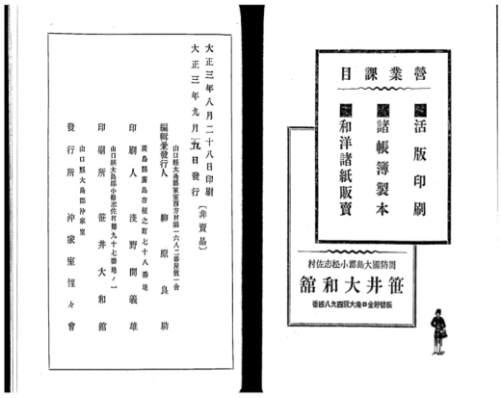

図２『かむろ』創刊号　後付け

各人へのアンケート、聞き取り、あるいは、伝聞によって取得したことが、各人についての記述から窺われる[9]。そのためか、消息内容は家族個々人の結婚や進学などの状況を詳細に伝えるものから、曖昧なものまで多様である。また、現況ではなく将来への望み、特に、海外雄飛、を記したものもある。以下に示した「【表１】「消息」欄に挙げられた在住地別人数」はこの「消息」に挙げられている情報をもとに論者が作成した表である[10]。（個々人の記述内に散見する家族については数に入れていない）

【表１】「消息」欄に挙げられた在住地別人数

本島在住者		６０人
内地在住者		４８人
	東京	４人
	大阪	７人
	兵庫	１人
	広島	５人
	山口	３人
	愛媛	６人
	福岡	７人
	長崎	７人
	佐賀	７人
	石川	１人
朝鮮地方在住者		９９人
	京城	１人
	龍山	２人
	仁川	１８人
	開城	１７人
	平壌	６人
	鎮南浦	２２人
	群山	７人
	慶尚南道	１人
	全羅南道	２人
	忠清南道	１人
	平安北道 新義州	９人
	義州	２人
	江南	１人
	馬山浦	１人
	黄安通	１人
	連山	１人
	在住地域不詳	７人
南満洲地方在住者		９人
	安東県	８人
	在住地域不詳	１人
濠州		１人
台湾地方在住者		８０人
	基隆	６１人
	打狗	１６人
	在住地域不詳	３人
南洋地方在住者		１人
	フィリピン	１人
布哇地方在住者		１３９人
	ホノルル	６５人
	ヒロ	６１人
	加哇島ククイ浦	５人
	馬哇島ヲハイナ	８人
北米地方在住者		８人
	アメリカ合衆国	４人
	カナダ	４人
南米地方在住者		５人
	ブラジル	５人
在住地記述部分を黒塗り		１人
不明		４人
軍隊（戦艦）		１０人

『かむろ』（第１号）より作成

１９１４年の時点で沖家室島の人々は、ハワイ、北米、南米、アジアなど広域な地域に生活圏を築いていた。「消息」欄には「見よ！！！ 本島が、如何に多くの海外奮闘者を有するかを。 見よ！！！本島人が、如何に海外に発展しつつあるかを」というエピグラフが付せられており、沖家室島出身者の海外におけるネットワークの拡大が、いかに沖家室島の人々、少なくとも、『かむろ』の編輯人達にとって重要事項であったかがうかがわれる。また、「消息」には現況ではなく将来の予定が記されている場合もあるが、「父ノ死後細君ヲ迎ヘテ鴛鴦ノ契コマヤカニ亡父ノ遺業ヲツイデ居マスガ、海外発展ノ希望ガモエテ居ルサウデス[11]」などのように、海外渡航の望みを殊更に伝えている者もいる。海外渡航は雑誌『かむろ』会員にとって「海外雄飛」であり、おそらく、共同体・沖家室島においてもそうであったことが窺われる。

創刊から４年後の１９１８年に発行された第１３号にも、「本島人名録大正六年末調査」に沖家室島関係者の現況が列挙されている。「在外者は可なりに正確に調査せり 在郷者は会員を主として調査せり[12]」と但し書きされており、創刊号掲載の「消息」と同様に、この調査が統計的な正確さに欠けている可能性は否めないが、沖家室島関係者が１９１４年の時点よりさらに様々な地域に生活圏を拡充させていった様を如実に示している

「【表２】「本島人名録大正六年末調査」の沖家室島関係者数」は「本島人名録大正六年末調査」に記載されている沖家室島関係者数を元に論者が作成したものである。【表１】同様に、個々人の記述内に散見する関係者の家族については数に入れていない。【表１】の黄色マーカーは第１３号の「本島人名録大正六年末調査」には挙げられていない地域を示している。また、【表２】の黄色マーカーは創刊号の「消息」には挙げられていなかった地域を示している。

【表２】「本島人名録大正六年末調査」の沖家室島関係者数

本島在住者		１２８人	（５３人）
内地在住者		７８人	（５３人）
	東京	６人	（ ５人）
	大阪	７人	（ ５人）
	京都	２人	（ １人）
	新潟	１人	（ １人）
	福島	１人	（ １人）
	兵庫	１人	
	岡山	２人	（ ２人）
	広島	１８人	（ ９人）
	山口	１３人	（ ７人）
	愛媛	６人	（ ３人）
	福岡	７人	（ １人）
	長崎	１２人	（ ８人）
	佐賀	２人	（１０人）
朝鮮地方在住者		１１０人	（４６人）
	京城	１１人	（ ２人）
	龍山	５人	（ ４人）
	仁川	１８人	（ ８人）
	開城	１８人	（ ９人）
	平壌	８人	（ ５人）
	鎮南浦	２１人	（ ９人）
	兼二浦	１人	（ １人）
	群山	２人	（ １人）
	大邱	１人	（ １人）
	慶尚南道	５人	
	全羅南道	１人	
	全羅北道	２人	（ ２人）
	忠清南道	２人	（ ２人）
	平安道	３人	（ １人）
	平安北道 新義州	１０人	（ ４人）
	義州	１人	（ １人）
	龍岩浦	１人	
南満洲地方在住者		１４人	（ ９人）
	安東県	１０人	（ ５人）
	安奉線	２人	（ ２人）
	郭家居	１人	（ １人）
	旅順	１人	（ １人）
謬州湾地方在住者		９人	（ ３人）
台湾地方在住者		１１１人	（１５人）
	基隆	４３人	（ ９人）
	台北	２人	（ ２人）
	打狗	６６人	（ ４人）
南洋地方在住者		５人	（ ４人）
	シンガポール	４人	（ ３人）
	インドネシア	１人	（ １人）
布哇地方在住者		１２２人	（７８人）
	ホノルル	４４人	（３６人）
	ヒロ	５８人	（４０人）
	加哇島ククイ浦	５人	（ １人）
	加哇島ワヘヤワー	１人	
	馬哇ワイルク	３人	
	馬哇島ラハイナ	１０人	（ １人）
	ワイアルナ	１人	
北米地方在住者		８人	（ ３人）
	アメリカ合衆国	４人	（ ２人）
	カナダ	４人	（ １人）
南米地方在住者		６人	（ １人）
	ペルー	１人	（ １人）
	ブラジル	５人	

『かむろ』（第 13 号）より作成

（ ）内は『かむろ』の会員数を示す。

第１３号が発行された１９１８年の時点で、沖家室島出身者が多い日本の地域は、広島（１８人）、山口（１３人）、長崎（１２人）で、『かむろ』の会員数でみると、佐賀（１０人）、広島（９人）、長崎（８人）、山

ロ（７人）となる。日本内地では周防大島近隣の地域が移動地として好まれていたようである。広島の１８人中１４人が軍隊関係での居住で、自身の選択の結果ではないことを考慮すると、長崎の多さは突出している。「本島人名録」ではすべての人の職業は明記されてはいないが、明記されている範囲内で言えば、長崎在住者はほぼ漁業従事者のようである。長崎における島出身者の多さは周防大島の人々の漁業技術が、長崎で必要とされていた様を示している。

「本島人名録」によれば、本島在住者に次いで多くの人が住んでいる地域は、ハワイ（１２２人）、台湾地域（１１１人）、朝鮮半島地域（１１０人）であり、『かむろ』会員数では、ハワイ（７８人）、本島（５３人）、日本内地（５３人）、朝鮮半島地域（４６人）となる。シンガポール、インドネシア、ペルーは第１３号で新規に挙げられた地域である。「本島人名録」に従えば、居住者が少なく、おそらく、近親者や同郷者も少ないと思われる、これらの地域を渡航先とした人々の選択理由については、今後の課題としたい。

2.2　『かむろ』の構成

号によって多少の違いはあるが、『かむろ』は概ね以下のような構成をとっている。

- 巻頭
- 主張
- 本会記事
- 本島記事
- 通信
- 文芸
- 編集室

１８８０年代後半以降、日本各地で同郷会が作られ、それに伴い、機関誌が発行されていった[13]。成田によれば、当時の機関誌の構成は「どの同郷会の機関誌も、同郷会の活動の記録を掲げ、それを会員で共有していくとともに、「会員の消息」も記す。「故郷」の人々の動向、東京にいる人びとの挙動を、卒業・入学や「栄達」をはじめ、結婚、死亡から病気、出張（＝「上京」）にいたるまで、ていねいに伝える。また、「故郷」の出来事も掲げられる[14]」ものであった。『かむろ』の構成、および、「消息」で伝えられる内容は、渡航する望みが殊更に記述されている点を除けば、当時の他の機関誌と同様のものであったと言えよう。

当時の同郷会機関誌では「通信」欄が設けられており、故郷の情報と会員のいる様々な地域の情報を掲載している[15]。同様に、『かむろ』では沖家室島の情報に加えて、「ヒロ通信」「東都通信」「基隆通信」「南洋通信」など、先に確認した「消息」や「本島人名録」に挙げられた地域の「在外者」から、「在郷者」へ不定期に伝えられる情報が掲載されている。「在外者」からの「通信」には「上陸後三日以内に、政府移民局に届出（トラテンカード）を受けなければならぬ[16]」や「当地は決して噂程のよき地にては無之候[17]」などのような、今後渡航する者に有用な現地情報や、「彼等の間に生れた混血種は、徳川幕府の命に依り、此のジャガタラに送り返したものなれば、其当時日本に向けて送り来たものが即ちジャガタラ芋である事が判る。之を思ふに付けても実際吾等日本人の意気地の弱き、発展の微々たるもので有る事を観る可きである[18]」のような、渡航によって顕在化したのであろう、外部から内部を省みる視線に基づいた観察もある。しかしながら、現地の状況や現地の人についての情報より、個人的な近況報告や当地で成功した沖家室島出身者の話などに重きを置いた、殊更に異国（あるいは地域）在住であることを表さない「通信」も少なくない。個人的な事柄を他者と共に享受・消費していく場である、同郷会機関誌の「通信」欄について、成田は「東京・「故郷」の連絡を維持し、「同郷」に生きること――「同郷」の「きずな」を確認し、互いの連携を図るのである[19]」と指摘している。『かむろ』においても、「通信」に掲載された通信は、発信者から受信者へと一方向に伝達される言説ではなく、共有されることによって「在外者」と「在郷者」という違いを超えて、つまり、地理的に離れていることや、異なる文化圏にいることなどの差異を際立たせるのではなく、共に沖家室島関係者であるという思いを、在島者と在外者との間で練り上げ、創り上げていくことに、より多く寄与している。

図 3『かむろ』第2号

表紙：第2号以降の表紙は沖家室島の一風景を描いている。「「同郷」の「きずな」を確認し、互いの連携を図る」装置の一つと言えよう。

2.3　『かむろ』の発刊目的

１９１４年に発行された『かむろ』創刊第１号は以下のような４章構成である。（章番号は論者による）

１．筆のはじめ
　かむろ
　発刊について

２．君も来たまへ僕も行く

　他郷にある人に
　家室の青年諸君
　弟や妹のある人に
　会名改名の理由

３．無事ですか

　消息
　葉書通信
　支部

４．雑

　ご注意までに
　編輯室より

この創刊号は各章に掲載された記事の内容によって、大きく二つに大別することができる。１章「筆のはじめ」と２章「君も来たまへ僕も行く」では、『かむろ』の目指すものが語られ、３章「無事ですか」と４章「雑」では沖家室島関係者の情報が掲載されている。ここでは、１章と２章に着目し、創刊時における『かむろ』の方向性について確認したい。

『かむろ』創刊号の表紙をめくると、おそらく沖家室島の海と海辺の風景を表したのであろう、郷愁を興させるイラストの下に（図４）[20]、「かむろ」と題された以下の文が掲載されている[21]。

図４『かむろ』第１号　扉絵

一、かむろは、我等の生れた處である。同時に我等の魂魄が、永眠すべき唯一の山河であらねばならぬ。ここには常に、我等の血の滴りがあかく。

一、かむろは、祖先墳墓の地である。我らの祖先は、常にここに奮闘し、常にここに活動した。家室はこれ等祖先の手につくられた遺産である。

一、かむろは、更に我等によつて一層の発達を願ひ、我等の子孫によつて、とほく、はるかに、発展と存在とを祈つて居るであらう

一、かむろは、かむろに対する自己の責任から免れんとする人を悪んでは居るまい。それでも我等の祖先は、各自その責任をはたした。

一、我等は、常に家室に対する自己の責任を覚らねばならぬ。我等はいついかなる場合にでも、家室といふ名を忘れる勇気はない。

一、かむろ！！なんと我等をふるひたたせるではないか。我等はより以上美しく、より以上したはしい響きをきくことが出来やうか。

ここで＜カムロ＞は「家室」と「かむろ」の２種類の表記で表されている。漢字表記の「家室」は実在の地、沖家室島を表し、本島在住であれ外地在住であれ、沖家

室島関係者が帰属する場を表し、ひらがな表記の「かむろ」はより象徴的なものとして呈示されているようである。つまり、「かむろ」とは全ての沖家室島関係者にとっての慈しみの対象であり[22]、力の根源であり、沖家室島関係者間で形成される人的ネットワークの結節点であるのだ。また、「かむろ」への思いは過去（「祖先」）・現在（「我等」）・未来（「子孫」）を通じて継承され、この地に流れる血の連続によって受け継がれていくものとして表されている。創刊号最初のページに掲載されたこの文章は、雑誌『かむろ』とは想像的共同体＜カムロ＞――現実に存在する地域であると同時に、人々の心の中に存在する理想郷――を人々が協同し創造していく場であることを宣言しているのである。

また、１章「筆のはじめ」に収められた「発刊に就て[23]」では、『かむろ』発刊の目的・意義について纏められている。筆者はまず、若者が島を離れて行かざるを得ない島の現状を踏まえ、以下のように語っている。

> 愛郷心燃ゆるが如き本会員の多くは、熱烈に本会の隆盛を祈るとしても、罌粟大の本島は、活気溢れる青年の活動舞台ではない。本会員の多数は、海外異郷に於ける奮闘の健児である。一度故郷を離れた此等の胸中から、燃ゆるが如き愛会の意気も、努力も、そこにあらはすべき何等の術のないため、あたら、自然の消滅を防ぎ得ないのは自然ではあるまいか。

『かむろ』は特に在外者に向けて提供される、「愛郷心」を言語化し表現する場である。また、言語表現を通じて「愛郷心」を育てていくことによって、島在住者と在外者との間にある、解消することのできない物理的距離を、互いの心理的距離感を近づけることによって、補填する効能も期待されている。さらに、「発刊に就て」の筆者は「内外会員の結束を堅くし、親睦を増進し、相携へて本会の隆盛、本島の発展に資せなければならぬ」と続けている。つまり、島在住者と在外者を結びつける「愛郷心」は、島に発展をもたらすための不可欠な土壌なのである。

２章に収められた「家室の青年諸君に[24]」の筆者、仙境の人は、島の発展には「公共」が必要と説いている。彼のいう「公共」とは「精神も、事業も共に公共でなくてはならぬ」ものであり、「個人も貴重だが、村は更に、県は更に、国は更に貴重なものだといふ事」である。つまり、各個人が皆のために尽くすことが「公共」として呈示されている。同じく２章に収められた、老船頭の「弟や妹のある人に[25]」は、教育についての提言である。「悪いことはいはぬ。今から先の子供は、家室にばかりは居らぬ。どこへでも飛び出して一もうけとくる。家を出たら一も字二も字だ」と述べる筆者は、まず、経済的な面で海外渡航に頼らざるを得ない島の現状を踏まえ、沖家室島の人々に教育の必要性について喚起している。

本稿が取り上げた『かむろ』創刊第１号から第１３号まで、「愛郷心」「教育」「公共」はいずれも幾度も繰り返し語られるキーワードである。創刊号において郷土の誇りとして高らかに宣せられた、立志のために沖家室島から外へと向かう移動と、心理的に沖家室島へ引き付ける求心力としての「愛郷心」、さらに、沖家室島からの移動を成功させ、傑出した個人となるための「教育」と、個人と集団を連携させる「公共」。島から離れることと島へ執着すること、そして、教育を受け個人として立つことと、集団を形成する一成員となること。いずれも、方向の違う二つのベクトルが共存しているように思われる。しかしながら、このような自己撞着的な共存は『かむろ』だけではない。北川は日露戦争後の日本で発表された投稿雑誌を精査し「立身出世を志して都市に移動した青年たちは、自身が綴る作文のなかで、生まれ育った土地を、四季折々に異なる姿を見せる美しい自然に恵まれたかけがえのない＜故郷＞に作り替えることで、みずからのアイデンティティを構築し、資本主義経済体制を支える国民となった。（中略）自然を書く営みは内地では以上のように、国民国家体制に個人を参加させる有力な装置となった[26]」と指摘している。ベクトルの方向性の違いを含みこみ、諸共に沖家室島の発展へと集約させるものが「愛郷心」であり、それを興させ、さらに育て上げていくのが言語活動である。雑誌『かむろ』とは言語化を通じて涵養され増幅される愛郷心を元に、個人の立身と集団の発展が互いに連携し、それによって、想像的共同体＜カムロ＞を創り出すことを指向する場なのである。

2.4　『かむろ』の文芸欄

『かむろ』は第２号から継続的に文芸欄を設けており、随筆、小説、短歌、俳句などが掲載されている。後付けに非売品と明記されている『かむろ』（図２参照）の投稿者および読者は、『かむろ』会員にほぼ限られていたと思われる。本章では、作者も読者も『かむろ』会員や沖家室島関係者で構成された、極めて限定的な『かむろ』の言説空間の中で、どのような作品が掲載され、作者・読者間で享受・共有されたのかを確認する。

91

文藝

弱者

孤舟

いつの間にか冬となつた。

冬は深々に物をきはせる時だ、低く垂れた灰色の雲は重く頭を壓する、吹寒、木枯の響は痛く神經を感傷する。枯死した自然の窶憔たる光景は生活を感じしむる。枯死は健康である。深刻に思索し、沈默し人生に味はしびる時である。

寒風は鳴響いてゐる間は、人間は緩つて得に暗い姿となる。温かな春の日を待つて居る。私は此の寂寞に抵抗せねばならぬ。

私は、今の私には其を出來ない。

然しながら、すべての自然は、冬は靜かに眠つて居る。

私は、寒に慄えて、自己は、鼻唄を歌つて過ごなら。私は冷水浴でもつて自己を鞭ち、寒虚に終るべき冬眠を想慰して公に振激くなつた。

私が若し胡蝶の血をすゝる猛者であつたなら、强い歓樂に酔うて、胡蝶の苦痛を冷笑することが出來たらうに、人生に於ける行路病者として私は、勝利者と敗北者の悲哀を、苦ムに樂な事を尋へて見る悲、勝利者と敗北者の過去を想像して見る時、傷ましい感が胸に觸れて來る。

自分は何の爲に生きるか。自己の存在に對して懐疑の念を抱かざる者は愚者だ。然し、愚者は幸福であるかも知れぬ。私は眞實な自己を見出す事は出來ない。隨つて苦惱も減じない。既に閉塞する氣力もない。私は眞實なる自己發見が不可能であるを知つた時、人生の響の鳴くらない様な處でかさくなつて、靜かに沒欲して居たいなる。

夜は靜かに更けて、悲調なる微聲が佛つて來る、行灯が冷たくなつて背から水の樣な風が襲つて來る。

肉體は鳴つて頭かが微しなつた。閑寂の事想慰なる心なくなつた。强烈の印象を忘れ去なる、孤寂的な心持に落ちていつた。

私さへ、れば、よいのだ、私さへ、慰しければよいのだ、地上の高物は悉く枯死して何へ行けいのだ、人生がな

図５『かむろ』第７号　文芸欄　p. 27[27]

投稿作品の大半をしめる短歌、俳句の多くは、恋愛や自然風物を詠っている。その土地の特徴を帯びる自然風物に向き合うことは、否応なく観照者のアイデンティティ形成に影響を与える営為である。しかしながら、『かむろ』第２号から第 13 号に掲載された、自然風物を詠んだ短歌や俳句の多くは、執筆者がそれらの作品の執筆時にどの地域の自然に対峙していたのかを、明確に表してはいない。沖家室島と国内のそれ以外の地域との違いのみならず、海外在住者と国内在住者の違いでさえ、これらの作品は明示してはいない。もちろん、当時、沖家室島から離れて生活している執筆者の多くは、その土地に移住し住み続ける意図はなく、一時的に滞在しているにすぎなかったという点は無視してはならない。しかし、それでもなお、自然描写にその土地の特有さが表されていない特異さは、『かむろ』に発表された多くの作品が示す特徴である。定型句によって自然美を詠うこれらの作品は、作者の目の前に現前している多様な風景ではなく、生活基盤がどこであろうと、執筆者たちが精神的に帰属し続けている想像的共同体＜カムロ＞の様を表しているのではないだろうか。また、北川が指摘したように、定型句を用いて伝統的自然美を詠うこれらの作品は、この時期の書くという営みが、過去に書かれた名文や名歌を学び、それをアレンジしていくものであったことも如実に示している[28]。

上記のような傾向をもつ『かむろ』掲載作品の中で、第１２号（１９１７）に発表された、博俊の俳句「暑き夜に夢は日本に渡りけり」や「月清し、金髪ゆれて風薫る」は、少なくとも制作時には作者は海外に滞在していたであろうことが示されている点において例外的である[29]。「月清し、金髪ゆれて風薫る」の特徴は「金髪」と、「月清し」や「風薫る」の併記である。日本の自然風物を描写する定型句に異国風のノイズが挿しはさまれていることによって、異邦人として居る作者の姿が明確に表されているのみならず、「月清し」や「風薫る」がその土地の独自性を含み込んだ新たな意味へと生成されている様も表している。

また、投稿者が執筆時に日本（あるいは、沖家室島）に居住していたことを明示する作品もいくつか掲載されている。「われもまた蝶のごとくに国々をまわりてみたし春の夕暮れ[30]」や、「君住める南の空に黒き雲薄ふ流れてものをもはする[31]」などは、執筆者が日本に居ることが創作動機に関与している。日本に居る自分と海外に居る他者を対比するこの種の作品の多くは、海外にいることは海外雄飛として、一方、日本に居ることは共同体の趨勢から逸れていることとして表す傾向にある。

次に、『かむろ』掲載小説について確認したい。当時の、虎列刺（コレラ）などの流行を受け、『かむろ』では伝染病に関する記事や報告が度々掲載されている。深刻な状況に直面していない沖家室島では、伝染病は、蔓延している地域と病の伝染を防いでいる沖家室島とを、つまり、他者と自己とを明確に弁別する役割を果たしている。『かむろ』掲載の小説においても、この事情は反映されており、病は立身出世を目指す社会趨勢からの脱落、共同体からの離脱を表す記号として頻繁に使われている[32]。また、翠陰の「芳子さん」のように、「人が時々あの子も可哀想にと云ふ」状況になり、共同体から逸脱せざるを得なくなった者を、病気の罹患と関連づけて表現している作品もある[33]。小説「芳子さん」の結びの一文、「故郷より捨てられ見離された身の上これから先はどうなることでせう」は、直接的であれ間接的であれ、病に言及している『かむろ』掲載小説が、故郷という共同体と個人との関係を表したものであることを明示している。これらの小説は共同体からの離脱というテーマを通じて、想像としての共同体＜カムロ＞創出を担っているのである。

3. 結び

ここまで、『かむろ』の言説空間について確認してきた。『かむろ』は国内外の様々な場所に生活圏を広げていった周防大島沖家室島の人々と沖家室島在住の人々によって刊行を続けた雑誌である。しかしながら、『かむろ』に

おいて表現されているのは、それぞれの生活圏の独自性や違いなどの多様性ではなく、人々が生活圏の違いを超えて、一様に、抱くことを意図された、故郷＜カムロ＞への愛郷心であった。『かむろ』は想像体としての＜カムロ＞を創り出すことによって、島の内外在住者間のネットワーク形成とその強化に寄与していたのである。月刊紙となった第１３号以降の『かむろ』がどのように変化したのか、あるいは、しなかったのかについては、今後の課題としたい。

謝辞

本稿は日本比較文化学会第42回全国大会・2020年度国際学術大会における口頭発表「海外移住者と日本在住者との情報共有と文化的アイデンティティ形成について ―周防大島町沖家室島発行『かむろ』分析を中心に―」（９月５日、オンライン）に基づいている。質疑応答等でご教示いただいた諸氏に謝意を表する。さらに、泊清寺の住職、新山玄雄氏には、『かむろ』発行の経緯に関することについて、ご教示いただきましたこと、感謝申し上げます。また、本稿は科研費による研究課題「ラフカディオ・ハーンの分野横断的研究―ハーンの翻訳・創作・教育の相互影響関係」（若手研究、研究課題番号 20K12996）、山口大学研究推進体「人と移動研究推進体」、及び、山口大学山口学研究プロジェクト「山口県におけるハワイ移民のビックデータ解析と新規事業の創出」による成果の一部である。

文　　献

[1] 沖家室猩々会,『かむろ』第１号～第１３号.（1914-1918）.
本論文中の『かむろ』は、泊清寺編,『かむろ復刻版』泊清寺（2001-2004）を参照しているが、頁番号は雑誌「かむろ」の頁番号を記載している。
[2] アンダーソン, ベネディクト.（白石さや・白石隆訳）『定本 想像の共同体　ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山, (2007).
[3] 大谷松治郎『わが人となりし足跡――８０年の回顧』文洋社 (1971).
[4] 小川真和子『海の民のハワイ――ハワイの水産業を開拓した日本人の社会史』人文書院 (2017).
[5] 北川扶生子,「「やまと新聞」投稿欄にみるハワイ日系日本語文学の草創期」『日本近代文学』第８９集(2013)p.6.
[6] 北川扶生子,『漱石の文法』水声社, (2012).
[7] 産業・地域システム研究会,「地域の風土・産業・文化を生かした離島・本島活性化の課題 ― 周防大島と沖縄本島の見学調査をふまえて―」『名古屋学院大学ディスカッションペーパー』１19 号, pp.1-54.（2016）.
[8] 田中聡,『衛生展覧会の欲望』青弓社, (1994).
[9] 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館『企画展示　ハワイ　日本人移民の１５０年と憧れの島のなりたち』一般財団法人歴史民俗博物館振興会,（2019）.
[10] 成田龍一,『「故郷」という物語 都市空間の歴史学』吉川弘文館,（1998）.
[11] 日比嘉高,『ジャパニーズ・アメリカ−移民文学・出版文化・収容所』新曜社,(2015).
[12] 宮本常一・岡本定,『東和町誌』近畿日本ツーリスト株式会社日本観光文化研究所（1982）.
[13] 宮本常一,『周防大島民俗誌』（宮本常一著作集４０）未来社（1997）.
[14] 安井眞奈美,『山口県史 民俗編』山口県（2010）.
[15] 安井眞奈美,「雑誌『かむろ』に掲載されたハワイ関連記事――山口県大島郡周防大島町沖家室島 2013 年度民俗学習実習報告」『古事：天理大学考古学・民俗学研究室紀要』18 冊（2014）.
[16] 安井眞奈美,「ハワイと故郷の島を結ぶ−−山口県沖家室島の雑誌『かむろ』より−−」『立命館言語文化研究』３１巻１号（2019）.
[17] 劉王奇思,「周防大島の移民と出稼ぎの基礎的研究：沖家室『かむろ』の分析を中心に」『比較日本文化学研究』(2017).
[18] 劉王奇思,「雑誌『かむろ』から見る女性の地位と役割：恋愛・結婚を通じて」『比較日本文化学研究』(2019).

[1] 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館『企画展示　ハワイ　日本人移民の１５０年と憧れの島のなりたち』一般財団法人歴史民俗博物館振興会, p.190.

[2]産業・地域システム研究会,「地域の風土・産業・文化を生かした離島・本島活性化の課題 ― 周防大島と沖縄本島の見学調査をふまえて―」『名古屋学院大学ディスカッションペーパー』１19 号, pp. 1-54.（2016）.
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館『企画展示 ハワイ 日本人移民の１５０年と憧れの島のなりたち』一般財団法人歴史民俗博物館振興会,（2019）.
宮本常一・岡本定,『東和町誌』東和町（2004）.
宮本常一,『周防大島民俗誌』（宮本常一著作集４０）未来社（1997）.
大谷松治郎,『わが人となりし足跡―８０年の回顧』文洋社（1971）.
小川真和子,『海の民のハワイ――ハワイの水産業を開拓した日本人の社会史』人文書院（2017）.
安井眞奈美,『山口県史 民俗編』山口県（2010）.
安井眞奈美,「ハワイと故郷の島を結ぶ−−山口県沖家室島の雑誌『かむろ』より−−」『立命館言語文化研究』３１巻１号（2019）. など。

[3] 例えば、安井の先に挙げた論文に加え、以下のような論文が発表されている。
劉王奇思,「周防大島の移民と出稼ぎの基礎的研究：沖家室『かむろ』の分析を中心に」『比較日本文化学研究』（2017）.
安井眞奈美,「雑誌『かむろ』に掲載されたハワイ関連記事――山口県大島郡周防大島町沖家室島 2013 年度民俗学習実習報告」『古事：天理大学考古学・民俗学研究室紀要』18 冊（2014）.

[4] 会名が沖家室惺々会であることについて、会長、柳原俊三は『かむろ』第１号初秋の「會名改名の理由」において、「本會は、或一部の青年の集合団体ではない」からと述べている。

[5] 会員消息欄に寄付金の受領について明記されている号もあるが、それが『かむろ』の発行に使われたかどうかについては明らかではない。２００１年に、『かむろ』を復刻した、沖家室島にある泊清寺の住職、新山玄雄氏によれば、『かむろ』は沖家室惺々会の会報であるので、会費から賄われたのであろうということである。『かむろ』発行の資金については今後確認していきたい。

[6] 柳原良助氏の詳細については今後確認していく。

[7] 安井眞奈美, 前掲書, p. 84. (2019).

[8] 「消息」『かむろ』第１号，pp. 9-30. (1914).

[9] 例えば、「亜米利加ノドコカ数度キイタガワカリマセン」（p. 31）や「台湾デセウ」（p. 15）などから、調査の様が推測できる。

[10] １９１４年以降の、島からの転出、及び、島への転入に関する台帳は移民歴史資料館にあるが、未整理の状態である。また、台帳に記された情報も記入漏れなどが散見している。

[11] 「消息」『かむろ』第１号，p. 28. (1914).

[12] 「本島人名録大正６年末調査」『かむろ』第１３号，pp. 49-65. (1918).

[13] 成田龍一,『「故郷」という物語 都市空間の歴史学』吉川弘文館，p. 35. (1998).

[14] 同書，pp. 45-46.

[15] 同書，p. 46.

[16] 木村博俊,「南洋通信」『かむろ』第１２号，pp. 16-17. (1917).

[17] 筆者不詳,「青島通信」『かむろ』第１３号，p. 27. (1918).

[18] 木村博俊, 前掲書，p. 17. (1917).

[19] 成田龍一,『「故郷」という物語 都市空間の歴史学』吉川弘文館，p. 46. (1998).

[20] 『かむろ』第８号(1916)以降、挿絵や扉絵には当時の流行を反映してか、アールヌーボ調の意匠が描かれている。

かむろ
第八號

図６『かむろ』第８号 p. 1

[21] 筆者不詳,「かむろ」『かむろ』第１号，p. 1. (1914).

[22] 例えば、佐村清一は「『懐郷病』それは我々の最も美しい性情の発露」と記している。(「故郷」『かむろ』第６号, p. 9. (1916).)

[23] 筆者不詳,「発刊に就て」『かむろ』第１号，pp. 1-2. (1914).

[24] 仙境の人,「家室の青年諸君に」『かむろ』第１号，pp. 5-7. (1914).

[25] 老船頭,「弟や妹のある人に」『かむろ』第１号，pp. 7-8. (1914).

[26] 北川扶生子,「「やまと新聞」投稿欄にみるハワイ日系日本語文学の草創期」『日本近代文学』第８９集 p. 6. (2013).

[27] 扉絵や挿絵などの作者については、今のところ何もわかっていない。今後の課題としたい。

[28] 同書, p. 5. (2013).

[29] 博俊,『かむろ』第１２号，p. 24. (1917).

[30] 大阪　胡蝶,『かむろ』第２号，p. 23. (1915).

[31] 今井島静,『かむろ』第２号，p. 24. (1915).

[32] 例えば、今井島静,「病める弟に」『かむろ』第３号，p. 21. (1915).（この作品は目次では作者は「島峰」、題名は「弟へ」となっている)、今井島静,「あきらめ」『かむろ』第４号，pp. 27-30. (1915) および、『かむろ』第五号，pp. 27-30. (1915). HAYASHI,「不断の覚悟」『かむろ』第１１号，pp. 22-25. (1917). など。

[33] 翠陰,「芳子さん」『かむろ』第９号，pp. 27-28. (1916).

〈作者略歴〉
藤原　まみ（ふじわら　まみ）
2013 年九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻博士後期課程修了，博士（比較社会文化）．現在　山口大学国際総合科学部准教授